

## 井上恵理の脈診について

周防 一平, 小田口 浩, 花輪 壽彦

北里大学 東洋医学総合研究所 医史学研究部

日本独自の鍼灸治療法である経絡治療は昭和戦前期より岡部素道, 井上恵理, 竹山晋一郎, 本間祥白らによって理論体系の構築がなされ現在に至っている。その特徴は, すべての疾患を経絡の変動(陰陽虚実)としてとらえ, 要穴に対して鍼灸補瀉手技を加えることにより変動を調整し治療を行うという点にある。この経絡の変動をとらえるのに, 主として脈診が用いられる。経絡治療の脈診といえば比較脈診がよく知られている。六部定位(左右寸口, 関上, 尺中に経脈を配当したもの)のそれぞれの脈の強さを比較し, 沈位にて弱い部位を陰虚, 浮位にて強い部位を陽実として証を立てる方法である。ところが井上恵理は講演の中で, 比較脈診を否定し別の脈診方法を提示していた。そこで, 本発表ではその内容と考察について述べることにする。

講演録音は, 東洋はり医学会「難経 解説」(120分テープ全16本)に収録。井上恵理による難経についての連続講義を録音したもので, 時期の記録はないが, 途中本間祥白の急逝について触れているので昭和37(1962)年前後のものであろうと推測される。以下に脈診について述べている部分を抜粋する。

とかく五行というものを覚え始めると陰陽を忘れてしまうことが多いのです。五行のいわゆる相生・相剋にとらわれて, それだけで治療が可能なりというように思うと, この陰陽を忘れてしまう(中略)寸関尺という脈証を五行に配当して, そうしてそれを診るということは, 我々は治療法を発見することなので, 病気を発見することではないのです。これを病気と考えると大きな間違いが出てくる(中略)治療法と診断法の相違はそこにある(中略)例えば右手の寸関が脈が弱くて, 左手の寸関の脈が強いというと, とかく肺虚証という証を付けたがる。ところがですね, 右手の寸関の陰陽の脈を診て両方とも低いという場合, 左手の方は陰陽を診ると陰が弱くて陽が強いというようなことは往々にしてあることなのです。この場合に弱い方が虚なのだということ肺虚証になってしまう。弱くても陰陽が調和しているということは病気ではない(中略)左手の方が陽が強くて陰がないということの方が病気なんです。ただ, 五行相生・相剋で脈を合わせてしまうところした誤りをとかく犯しやすい(中略)「実の中に虚を診る。虚の中に実を診る」ということを岡部(素道)君は脈の講義の中でよく言うが, 実に面白い言い方で, 強い弱いだけで脈が決められると, 弱い方をみな補って強い方を瀉せばいいという実に簡単な治療法が生まれてきます(中略)五行の法則というのは陰陽の調和を診ての上の治療法を発見することで, 病気はどこまでも陰と陽, その2つの調和がついているかないかということにある。(テープNo.2A 面第四難解説より)

ここで井上が述べているのは脈診における陰陽論, 五行論の優先順位である。五行論を優先すれば, 肺虚証(右手の寸関つまり肺脾の脈が弱い)となるが, 優先すべきは陰陽の調和であるため, 左手の脈に診られる陰陽の不調和を重視し, そちらに証を立てるべきだというのである。また, 岡部素道も同様に強弱のみで証を決定することに否定的であったこともわかる。

以上のことから, 経絡治療における六部定位脈診は, 現在は五行論による比較脈診を中心となっているが, 昭和30年代には陰陽の調和を重視した脈診が井上によって唱えられていたと考えられる。